

「絵入古今和歌集」(延宝七年刊本)の挿絵・続考

—和歌の絵画化の問題を中心に—

田野 慎二

キーワード 絵入古今和歌集 版本 挿絵 絵画化 嵯峨本伊勢物語

はじめに

『古今和歌集』の絵入り版本のなかで、延宝七(一六五七)年刊本(以下、「絵入古今A本」と略す)は、刊年がもつとも古く、上質の挿絵を多く含むものとして注目される。

稿者は、前稿において、この絵入り版本を、和歌集の挿絵編集の実態や和歌の絵画化の問題を考察するための恰好の資料であると位置付け、その挿絵に関する基本的な情報を整理し、和歌を絵画化した挿絵の趣向について若干の検討を加えた(一)。

その結果、先ず、「絵入古今A本」の挿絵は、前後の特定の和歌と対応した絵柄で描かれ、部立、配置など全体的なバランスをも考慮した、丁寧な編集が施されている点が具体的に明らかになった。一方、和歌の絵画化の問題については、秋部の挿絵や『百人一首』に選ばれた和歌の挿絵に限定して検討を加えたのみで、他の挿絵の分析が課題として残っていた。そこで、本稿では、後者の、和歌の絵画化の問題に焦点を絞り、「絵入古今A本」の挿絵の趣向について、さらに多角的な考察を行うことを目的とする。

考察の手順としては、先ず、前稿の不備を補訂した上で(二)、周辺和歌の内容を参照した絵画化の事例を検討する(三)。次に、先行する絵画資料・物語版本の挿絵や美術工芸品との接点を探り(四)、最後に、挿絵を丁寧に読み込み、その趣向を分析する(五)。以上のような手順で考察し、「絵入古今A本」の挿絵が、さまざまな趣向で描かれている実態を論じたい。

一 前稿の補訂

先ず、前稿の不備を二点補訂する。

「絵入古今A本」の挿絵五十図が、どの和歌と対応するかは、前稿【挿絵・和歌対照表】に示した。そのうち、挿絵②に対応する和歌を、

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる

かつみれどうとくも有かな月影のいたらぬ里もあらじと思へば

(雑上・貫之 880)

とした。しかし、これは、次に置かれた、

いけに月の見えけるをよめる

二なき物と思ひしを水底に山のつみならでいづる月かげ

でない、挿絵の絵柄と対応しない。

なお、前回、挿絵として掲げた今治市河野美術館蔵本(336-115、以下「今治本」と略す)では、挿絵⑩は、上空の月と池の水面に映る月とがちょうど朱色で塗られていた。【図版1】に、二つの月がより鮮明に見出せる、国文学研究資料館本(2-861-1)と、以下「国文研本」と略す)の同図を掲げた(2)。

(雑上・貫之 881)

人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵

二次使用禁止



(「絵入古今A本」挿絵④)

また、前稿において、挿絵⑩に対応する和歌を、

なぬかの日の夜よめる

年毎に逢とはすれど七夕のぬるよのかずぞすくなかりける

(秋上 躬恒 179)

とし、

これは、共寝をする数の少ない織女の身の上に同情した歌である。

挿絵の構図を決める情報はそれほど多くないが、天空に、牽牛、織女らしき星座を配し、二星が天河に隔てられている状況が具体的に描かれている。川面には、紅葉を浮かべる(今治本では、朱色に彩色される)。これは、

天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

(秋上 不知 175)

に見られる発想で、二人が逢うための橋として描き加えたものである。う。

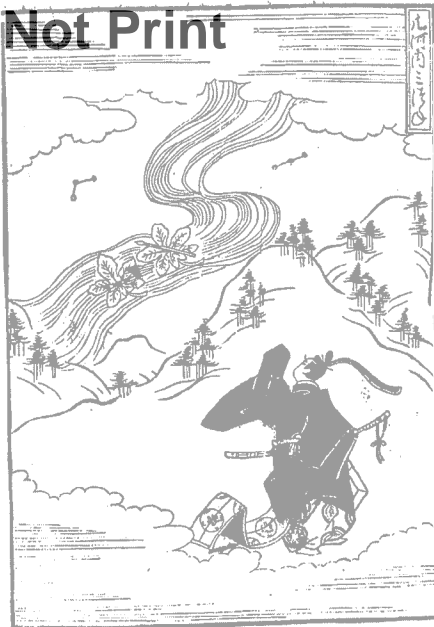
と分析した。この記述の前半はともかく、後半の「川面には……」以下の記述には問題があった。

挿絵⑩の川面の葉は、朱色に彩色されていて、影印では不鮮明になっていた。稿者は、これを紅葉だと早合点してしまったが、その後、この部分に、七夕に関わる意匠が施されていたことに気が付いた。国文研本の同図を掲げよう(【図版2】参照)。

【図版2】

二次使用禁止

人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵



(「絵入古今A本」挿絵⑩)

二次使用禁止
人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵

Not Print



右挿絵⑩の拡大図

そこには、川面を流れる葉の上に筆が置かれた図が描かれている。左の葉は、筆の穂先が葉脈に紛れているが、筆の軸が認められ、やはり同様の意匠で描かれていると見てよさそうである。

ける風習を象徴的に描いたものに違いない。和歌では、

七月七日かぢのはにかきつけはべりける

あまのがはとわたるふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな

(後拾遺集 秋上 上総乳母 242)

たなばたの心をよめる

たなばたのあまのとわたるかぢのはにおもふ事こそかけどつきせね

(初度本金葉集 秋 一宮小弁 245)

たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉づさ

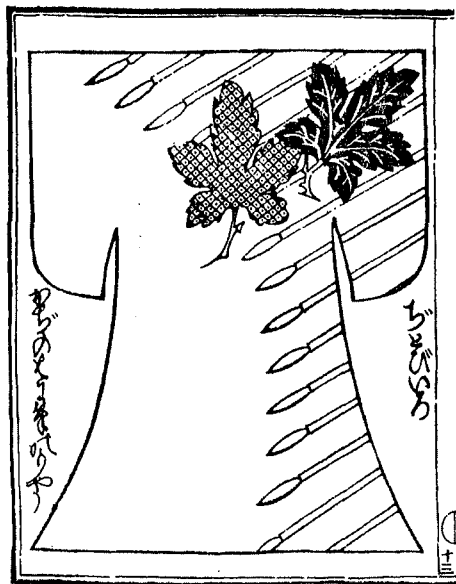
(新古今集 秋上 俊成 320)

のような形で詠じられる、ポピュラーな習俗の一つである。

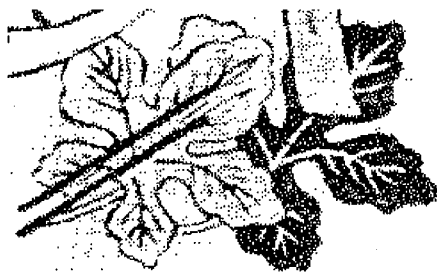
寛文七年(一六六四)年刊『新撰御ひいながた』には、梶の葉と筆を着物の文様として図案化した意匠が掲載される(「かぢのはに筆のもやう」)。やや時代は降るが、奥村政信画「七夕祭」(MOA美術館)には、梶の葉に筆二本を重ねた図が見出せる(【図版3】参照)。

以上が前稿の補訂である。特に、後者は、当該和歌以外の情報を活用した挿絵として注目される事例である。

【図版3】



(『新撰御ひいながた』)



(奥村政信画「七夕祭」・部分、大々判丹絵
静岡・MOA美術館)

二 周辺和歌の参照

挿絵の構図や描写に影響を与えたものとして、周辺に配列された和歌の存在があげられる。この点は、前稿でも、いくつかの例を報告していたが、本節では、さらに事例を補って、改めて検討しよう。

挿絵①に対応するのは、

二条のきさきの春のはじめの御哥

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

(春上 二条后 4)

である。挿絵では、屋根や庭、松に雪が積もり、端近に立つて庭を眺める女性(二条后)のごく近くの庭前の、まだ咲いていない梅の枝にとまる鶯が描かれている(【図版4】参照)。

二条后歌は、残雪のなかに春の訪れを感じ、鶯に思いを馳せる和歌である。鶯の居場所は明示されないが、鶯は、冬の間、山谷にいとされるから(「うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれかしらまし」古今集 春 大江千里 14)、庭の梅の枝に鶯をとまらせるのは、当該歌ではやや不自然な構図である(もちろん、梅と鶯の取り合わせ自体は常套)。

しかし、二条后歌の直後には、

題しらず

梅がえにきある鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

(春上 不知 5)

雪の木にふりかかれるをよめる

春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

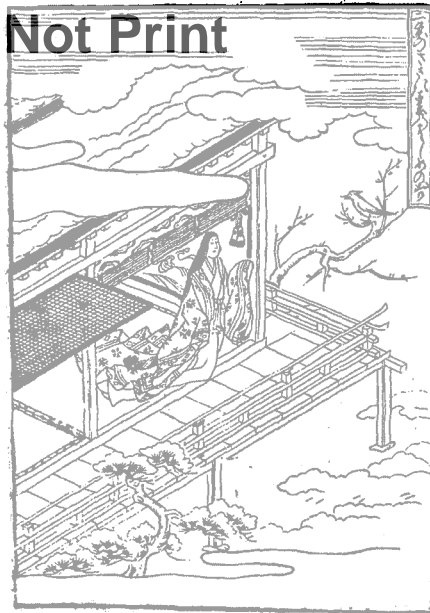
と、枝にやって来て鳴く鶯が詠じられる。挿絵①のように、梅の枝にとまる鶯が描かれたのは、この5・6番歌への連想が働いたためではないか。

(春上 素性 6)

【図版4】

二次使用禁止

人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵



(「絵入古今A本」挿絵①)

挿絵⑩に対応するのは、

秋の哥とよめる

雨ふれど露ももらじをかさとりの山はいかでもみぢそめけん

(秋下 元方 261)

である。この挿絵については、前稿で、

挿絵では、視点人物が、雨の降るなかを、お供に傘を差し掛けられ

て、神社の前を過ぎる様子が描かれている。和歌の内容だけからは、

このような構図とならないが、笠取山の掛詞の趣向を生かしつつ、雅

やかな雨中吟の図として仕立てたものと考えられる。

と分析した(【図版5】参照)。

【図版5】

二次使用禁止
人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵



(「絵入古今A本」挿絵⑬)

さらに、周辺和歌との関係では、挿絵⑬の構図に影響を与えたのは、元方歌の次に位置する、

神のやしらのあたりをまかりける時にいがきのうちの紅葉を見てよめる

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

(秋下 貫之 262)

ではないか。「神社の辺りを通ったときに、玉垣のなかの紅葉を見て詠んだ」という詞書の内容は、挿絵の構図とまったく一致するものである。

ただし、主人に従者が傘を差し掛ける構図で描かれた背景には、さらなる要因があることも想定できる。この点については、次節で検討する。

挿絵⑭に対応するのは、

秋の哥とよめる

さほ山のはゝその色はうすけれど秋はふかくも成にける哉

(秋下 是則 267)

である。この歌についても前稿で、

これは、佐保山の柞の紅葉はまだ十分に紅葉していないが、秋はすっかり深まってしまったという歌である。この挿絵では、佐保山の柞の紅葉を遠景に遠ざけ、視点人物が、秋が深まったと感じた状況を、庭で咲き誇る秋花で強調して表した点が工夫である。

と触れておいた(【図版6】参照)。

【図版6】

二次使用禁止
人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵



(「絵入古今A本」挿絵⑭)

挿絵の、秋花が咲き誇る庭の描写は、是則歌の次に置かれた、

人のせんざいにきくにむすびつけてうへける哥

うへしうへば秋なき時やさかざらん花こそちらめねさへかれめや

への連想が働いたのではないか。挿絵⑭でも、前栽の菊の花が大きく描かれ、秋の深まりを印象づけている。なお、『伊勢物語』五十一段は、この業平歌を「昔、男、人の前栽に菊植ゑけるに」として引く。参考までに、嵯峨本『伊勢物語』⁽³⁾の挿絵を掲げる【図版7】参照)。前栽の描写などには似通うものがある。

【図版7】



(嵯峨本『伊勢物語』五十一段挿絵)

(秋下 業平 268)

挿絵⑭に対応するのは、

あづまのかたへまかりける人によみてつかはしける

思へども身をしわけねばめにみえぬ心を君にたくへてぞやる

(離別 伊香子淳行 373)

である。一首は、二つに分けることのできない我が身の代わりに、我が心を連れ添わせてやりたいと、惜別の情を詠み贈った和歌である。詞書からは、すでに東国に出立した相手に贈り届けているよう

にも解釈できるが⁽⁴⁾、挿絵では、視点人物が、直接相手を見送るかのような、送別の場が描かれる【図版8】参照)。

【図版8】 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵 二次使用禁止



(「絵入古今A本」挿絵⑭)

注目したいのは、挿絵の上部に描かれた門と屋根(建物)である。これは何を意味しているのか。

ここで、『百人一首』にも撰ばれて広く人口に膾炙した蝉丸歌「これやこの行くもかへるも別れてはしるもしらぬもあふさかの関」に対する歌意図(延宝六(一七三〇)年刊『百人一首像讀抄』菱川師宣画)を掲げてみよう【図版9】参照)。一首は、逢坂の関における別れと出会いを詠じた和歌で、歌意図では、門と小屋で逢坂の関(関所)が示される。

挿絵⑭の門や建物も、逢坂の関(関所)を表したものと考えられる。東国への玄関である逢坂の関は、東国に赴く人を見送るに相応しい舞台である。

この推測を補うのが、淳行歌の直後に置かれた和歌の存在である。

あふさかにて、人をわかれける時によめる

相坂の関しまさしき物ならばあかずわかるゝ君をとどめよ

(難波万雄 374)

万雄歌は、まさに、逢坂の関での送別の場面で詠じられたことが分かる。淳行歌を絵面化する際に、直後の和歌を参照して、逢坂の関という具体的な場が設定されたと考えられる。

【図版9】



『百人一首像讚抄』蝉丸歌歌意図

挿絵⑩に対応するのは、

おきの国にながされて侍ける時によめる

思きや鄙のわかれにおとろへてあまのなはたきいざりせんとは

(雑下 小野篁 961)

である。一首は、隠岐国に配流の身となった篁が、「海人の縄たきいざりせんとは」と田舎暮らしを歎いてみせた和歌である。挿絵は、

篁と思しき人物が、縁側に立って海浜の女を眺める構図で描かれる

【図版10】参照。

【図版10】

二次使用禁止
人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵



〔絵入古今A本〕挿絵⑩

篁が眺める女は、海浜で、天秤棒を担いで桶を提げていることから、海水を運ぶ潮汲みの女であろう。(5) 【図版11】参照。しかし、

【図版11】



『人倫訓蒙図彙』卷三「塩焼」

篁歌の内容からは、むしろ、漁師が釣り縄を操りながら漁をする光景(海人の縄たき漁せん)の方が相応しかろう。ちなみに、「絵入古今A本」の挿絵⑨では、「海人」を示すものとして、浜辺に釣りをする海人の小舟が描かれている。篁歌との関係だけでは、挿絵⑩で、わざわざ潮汲みの女が

描かれる必然性は少ない。

ところが、篁歌の次には、塩焼きと縁のある和歌が置かれている。

田むらの御時に事にあたりて、つの国のすまといふところにも
り侍けるに、宮のうちに侍ける人につかはしける
わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

(雑下 行平 962)

「藻塩垂る」とは、海藻に海水を注ぎ掛ける作業のことだが(『八雲御抄』)、行平歌では、須磨籠居の憂さが、その厳しい作業に重ね合わされる。挿絵④の潮汲み女の描写は、この行平歌と一脈を通じているのである(10)。

以上、本節では、「絵入古今A本」の挿絵のなかから、対応する和歌の周辺の和歌が、挿絵の構図や描写に影響を与えたと考えられる事例を報告した。当該和歌との関係だけでは説明の付きがたい構図や描写も、周辺和歌の内容を勘案すれば、それなりの必然性が見出され、挿絵の趣向の一つとして認められるのではないだろうか。

三 傘を差し掛ける従者

本節では、前節で検討した挿絵③(【図版5】参照)における、主人に従者が傘を差し掛ける構図を取り上げる。

挿絵③で描かれた傘は、柄のある「差し傘」(からかさ)であるが、そもそも、和歌では直接頭に着る「被り笠」の方が多量ともい(11)。敢えて、挿絵のような構図で描かれたのはなぜだろうか。この点を、同様の構図が「源氏物語絵」「伊勢物語絵」に見出せる点に注目して検討しよう。

『源氏物語』蓬生には、荒れ果てた末摘花邸を久しぶりに訪れた光源氏が、蓬の生い茂った庭を、惟光に露を払わせて進む場面がある。

……惟光も、「さらにえ分けさせ給ふまじき蓬の露けさになむ侍る。露少し払はせてなむ、入らせ給ふべき」と聞ゆれば、

「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のものと心を」

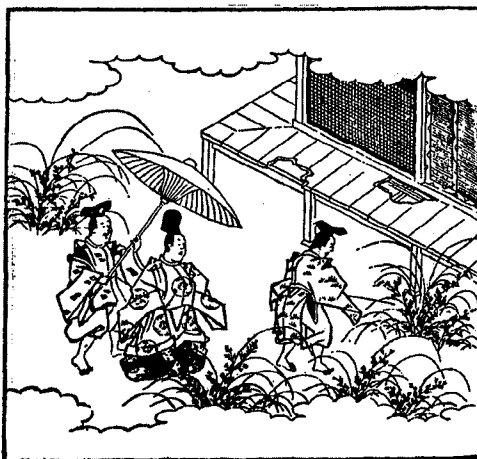
とひとりごちて、なほ降り給へば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつづ入れ奉る。雨そそぎも、なほ秋の時雨めきてうちそそげば、「御傘さぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞ゆ。御指貫の裾は、いたうそぼちぬめり。昔だに有るかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入り給ふにつけても、いとむとくなるを、立ちまじり見る人なきぞ心安かりける。

(角川文庫)

秋の時雨のような雨の雫が降りかかる光源氏に、惟光は、「みさぶらひみかさ」と申せ宮木ののこのしたつゆはあめにまされり(古今集 東歌 1091)を踏まえて声を掛ける。古今歌の「みかさ」は「御笠」だろうが、それを「傘」に取りなした、雅やかな場面である。

この場面は、国宝「源氏物語絵巻」(徳川美術館蔵)の、光源氏が従者に傘を差し掛けられている構図としてよく知られているものである。同様の構図を採用した源氏絵は多いが、ここでは、絵入りの版本の、万治三(一六六〇)年『源氏鬘鏡』蓬生の挿絵を掲げよう(【図版12】参照)。

【図版12】



（『源氏鬢鏡』蓬生）

また、『伊勢物語』八十三段では、出家して小野に隠棲した惟喬親王の御室を、主人公が訪れるエピソードが語られる。かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御鬢おろしたまうてけり。

睦月に、をがみ奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでてをがみ奉るに、つれづれといとものがなくしておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮れに帰るとて、忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとはとてなむ、泣く泣く来にける。

（角川文庫）

嵯峨本『伊勢物語』では、挿絵では、男（業平）が、惟喬親王に会うために、雪のなかを無理をおして出掛けて行った様子が次のように絵画化される（図版13参照）。

主人に従者が差し掛ける傘は、絵のなかで中心となる高貴な人物にスポットライトを当てるかのような役割をはたし、画面に、物語

的雰囲気醸し出すための道具立ての一つであったと言える。挿

絵⑬においても、「源氏物語絵」や「伊勢物語絵」などのような、先行する作品の挿絵の構図が念頭に置かれて、雅やかな王朝人の生活の一齣を描くために、この構図が採用されたのではないだろうか。

【図版13】



（嵯峨本『伊勢物語』八十三段挿絵）

四 嵯峨本『伊勢物語』の挿絵との類似

前節では、挿絵⑬の、主人に従者が傘を差し掛ける構図が、「源氏物語絵」や「伊勢物語絵」で馴染みの構図であった点に着目した。他にも、先行する絵画作品・資料にヒントを得て描かれたのではないかとと思われる挿絵はある。

本節では、「絵入古今A本」の挿絵のなかに、嵯峨本『伊勢物語』の挿絵と類似した構図の挿絵がいくつか認められる点を報告しよう。

まずは、羈旅部の挿絵二図（挿絵⑳、㉑）を取り上げる。

挿絵⑭に対応するのは、

あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれみやこのさかひなるらん

(竊旅 乙(おとこ) 413)

である。一首は、東国から帰京する途次に、都を隔てる春霞を恨んだ和歌で、挿絵では、男が、馬上で、霞のかかった山を遠く眺める構図で描かれる。(9) (【図版14】参照)。

【図版14】

人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵
二次使用禁止



(「絵入古今A本」挿絵⑭)

絵画化にあたって、視点人物の男をどう描くか(服装、徒歩か騎乗か、姿勢など)、山をどの方向に描くか、従者を描くのか(描くなら何人か)など、決めなければならないことはたくさんある。和歌の情報だけでは絵画化するのには難しいが、先行する画像に、ある程度依拠して描くこともできる。

たとえば、「東国」旅」というモチーフで、すぐに想起されるのは、

業平の「東下り」であろう。嵯峨本『伊勢物語』九段では、

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

という本文に対応して、次のような挿絵が付される(【図版15】参照)。

【図版15】



(嵯峨本『伊勢物語』九段挿絵)

視点人物の男は、旅先なのに冠に直衣姿で、騎乗し、右方向へ移動しつつ、振り返って山を仰ぎ見る。山は、左奥に描かれ、烏帽子狩衣姿の従者(大人)と童を連れている。これらは、「絵入古今A本」と一致するのである。直接、嵯峨本に依拠して描かれたかどうかは分からないが、大きくは、「伊勢物語絵」で練り上げられた構図を受けて描かれたと考えられる。

挿絵⑮に対応するのは、

たちまのくにのゆへまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとま

りて、夕さりのかれいひたうべけるに、ともにありける人々哥よ
みけるついでによめる

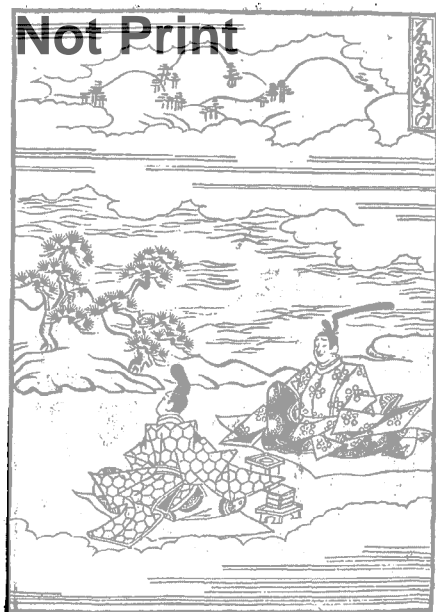
夕づく夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそみめ

(羈旅 兼輔 417)

である。一首は、ほの暗い夕月夜のころは様子がはつきり分らないので、二見浦は夜が明けてから見ることにしようという和歌で、地名に引つ掛けて、「匣」「蓋」「身の裏」「開け」と縁語掛詞を駆使して仕立てたところが見所であろう。詞書によって、旅先の夕餉の場で詠じられたことが分かる。

【図版16】

二次使用禁止
人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵



(「絵入古今A本」挿絵⑭)

挿絵では、海辺で、敷物を敷いて夕餉をとる主従の姿が描かれている(【図版16】参照)。冠直衣姿の男が兼輔で、狩衣姿の供の男は、兼輔の詠歌を受け止めて、見通せない二見浦を眺めているようにも見える。手前の膳の上に「匣」も描かれる。

嵯峨本『伊勢物語』九段では、一行は、三河国八橋の沢のほとりの木陰で、「乾飯」を食べて休息するのだが、この場面は、挿絵では、次のように絵画化される(【図版17】参照)。両者は、水辺で主従一行が食事をする構図(十敷物)が類似する。

【図版17】



(嵯峨本『伊勢物語』九段挿絵)

さらに、『伊勢物語』八段の挿絵と類似した挿絵も見出せる。挿絵⑮に対応するのは、

(題しらず)

ふじのねのならぬ思にもえはもえ神だにけたぬむなし煙を

(雑体 紀乳母

1028)

である。一首は、相手の男の思いを、富士山の噴火・噴煙に喩え、突っぱねた和歌である。「絵入古今A本」では、作者を男と解して挿絵が描かれる(【図版18】参照)。

【図版18】



(「絵入古今A本」挿絵⑤、今治本)

めぬ」と詠ずる。

嵯峨本『伊勢物語』では、主人公の男が、馬上から、左奥の浅間山を見上げる構図で描かれるが(【図版19】参照)、その脇で、手をかざして見上げている狩衣姿の供人に注目したい。この供人が、山を見上げる構図は、挿絵⑤の構図とよく似ているのである(富士山は、

【図版15】も参照)。

さらに一例追加しよう。

前稿では、挿絵②に対応する和歌については、二首の可能性があり、判断を保留した。その二首は、

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまだひまされる恋もする哉

(恋二 友則 561)

夕されば螢よりけにもゆれ共光みねばや人のつれなき

(恋二 友則 562)

である。いずれにしても、夏虫(螢)よりも、我が身の恋の思いの方が増さっていると歎く和歌である。挿絵では、その様子を、男が縁に座って、遣水の辺りに舞う夏虫(螢)を眺めるという構図で具体的に描く(【図版20】参照)。

一方、『伊勢物語』にも、思いを寄せてくれた娘の死を悼み、喪に籠もった男が、飛び上がる螢を眺める逸話がある(四十五段)。

……時は水無月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢高く飛びあがる。この男、見ふせりて、

行く螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこそ

暮れがたき夏のひぐらしながむれば

そのこととなくものぞかなしき

【図版19】



(嵯峨本『伊勢物語』八段挿絵)

『伊勢物語』八段では、東下り中、主人公が、信濃国浅間山の噴煙を眺めて、「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとが

嵯峨本『伊勢物語』の挿絵では、同じく、縁に座り、庭の遣水の上を飛び交う虫を眺める男の姿が描かれる(【図版21】参照)。

【図版20】



(「絵入古今A本」挿絵⑳、今治本)

【図版21】



(嵯峨本『伊勢物語』四十五段挿絵)

「絵入古今A本」の和歌の絵画化を考える上で、先行する絵画作品との関係は大きな問題となろう。本節では、その候補の一つである、嵯峨本『伊勢物語』の挿絵との関係に注目して検討を加えたのである(12)。

五 袖を被く

本節では、「絵入古今A本」のなかから、印象的な挿絵を取り上げ、その絵画的な情報を読み解き、挿絵と和歌との関係を検討してみた。

ここで取り上げるのは、春雨を、袖を被^かけて避ける男の姿が大きく描かれた挿絵⑳である(13)。(【図版22】参照)。「絵入古今A本」では、他に三図で、同様に振る舞う男がクローズアップされて印象的である(挿絵⑱、㉒、㉓)。

【図版22】



(「絵入古今A本」挿絵㉒、今治本)

挿絵⑳に対応するのは、

(題しらず)

ねになきてひちにしかども春雨にぬれにし袖とゝはごたへん

(恋二 大江千里 577)

である。一首は、袖が涙で濡れたことを隠すために、訊かれたら春雨に濡れたからだと答えようという和歌である。「春雨に濡れた」というのは言い訳だが、実際に春雨の頃に物思いをして詠じられたのかもしれない⁽¹⁴⁾。挿絵では、実際に春雨に降られて、袖を被く姿が描かれる。

稲田利徳は、和歌や物語・説話などの古典文学作品において、人が雨に濡れる場面に着目し、「その情景が愛の証や風流心を際立たせる背景になっている」点を浮き彫りにした⁽¹⁵⁾。その意味で、挿絵に、和歌では詠じられていない梅の花が描き加えられている点は注目される。

和歌では、春の雨と梅との取り合わせは、万葉以来のものだが、特に、

春雨のふらばの山にまじりなん梅の花がさありといふなり

(後撰集 春上 不知 32)

ちるまではきてもみるべく春雨にわれをぬらすな梅の花がさ

(古今和歌六帖 「かさ」 346)

むめの花ただにやはみむはるさめにぬれぬれぞなほをりやしてまし

(躬恒集 224)

などのような例が参考となる。「梅の花笠」は、梅花を笠に見立てたもので、片桐洋一は、この後撰歌について、

梅の花笠があるので濡れることもあるまいと言っているものの、春雨

が降ったら野山に入り梅の葉に濡れそぼってみたいという風流な気持

こそ真意であろう。

と注している⁽¹⁶⁾。躬恒歌は、その真意を明確に打ち出した和歌で

であろう。挿絵⑳は、春雨に濡れながら梅花を眺めるといふ、「風流心を際立たせる」趣向で描かれているのである。

さて、降る雪を、袖を被けて避けている男を描いたのが、次の挿

絵㉑である(【図版23】参照)。

【図版23】

人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵 二次使用禁止



(「絵入古今A本」挿絵㉑)

対応するのは、

としのはてによめる

あら玉の年のをはりになることに雪もわがみもふりまさりつゝ

(冬 元方 339)

で、一首は、歳末に降る雪に、我が身の老いを観じるといふ和歌で

ある。絵画化する材料はそう多くないが、和歌との関係では、わざわざ雪に降られて袖を被く姿勢の男を描く必要はなかるう。袖を被けて雪を避ける姿勢の男を大きく描くことで、王朝人の優雅な所作を再現することに狙いがあつたと捉えたい。

雨や雪を、袖を被けて避ける振る舞いは、何でもなし所作のようにも思われるが、もしそうであれば、四図の挿絵で取り立てられる必然性はない。この姿勢が、美的な感興を誘発するものであつたか

【図版24】

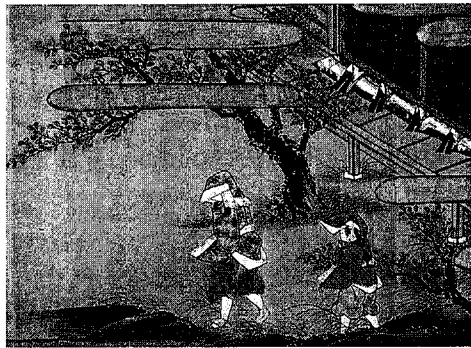


(後鳥羽院本「三十六歌仙絵」伊勢・部分、専修寺蔵)

さくらがり雨はふりきぬをなじくは
ぬるともはなのかげにかくれん

(拾遺集 春 不知 50 (17))

【図版25】



(小野家本「伊勢物語絵巻」121段挿絵・部分)

むかし、男、梅壺より雨に濡れて人のまかり
いつるを見て、

鶯の花を縫ふてふ笠はいな思ひをつけよほしてかへさむ

返し、
鶯の花を縫ふてふ笠はいな思ひをつけよほしてかへさむ (18)

らこそ採用されたと考えられる。

同じような姿で描かれた図像は、後鳥羽院本「三十六歌仙絵」(専修寺蔵)の伊勢の歌仙絵、「伊勢物語絵」(小野家本)、「佐野渡時絵硯箱」(五島美術館蔵)などのような美術工芸品にも見出せ、美的な鑑賞の対象となっていたことが知られる(【図版24、25、26】参照)。挿絵で描かれた構図・描写と美術工芸品との関係を探ることは今後の課題の一つであろう。

【図版26】



(「佐野渡時絵硯箱」部分、五島美術館蔵)

こまとめて袖うちはらふかげもなし

さのわたりの雪の夕暮

(新古今集 冬 定家

671)

六 挿絵を読む

本節では、これまで検討してきたことも踏まえつつ、挿絵を丁寧に読み込み、挿絵の趣向を分析する。その意図を十分に汲み取るとは言えないが、二図を取り上げ、私見を述べてみたい。

挿絵③に対応するのは、業平の代表歌の一つでもある、

なぎさの院にてさくらを見てよめる

よの中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

(春上 業平 53)

である。挿絵では、縁に立った男が、庭前の桜を眺めるといふ、よくある構図で描かれる(図版27)参照)。

【図版27】

二次使用禁止
人間文化研究機構 国文学研究資料館 所蔵



(「絵入古今A本」挿絵③)

『伊勢物語』八十二段は、この業平歌の詠歌状況を詳細に語る。「右のむまの頭なりけり人」が、惟喬親王に付き従って、水無瀬離宮

に赴き、狩りの途中で、交野にある渚の院に立ち寄り、桜の木の下で宴を開いて和歌を詠じる。

……狩はねむころにもせて、酒のみ飲みつゝ、やまと歌にかかれりけり。今狩する交野の渚の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、上、中、下、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。……

この状況をよく踏まえて、嵯峨本『伊勢物語』では、次のように君臣和楽の睦まじい風流な光景として絵画化される(図版28)参照)。

【図版28】



(嵯峨本『伊勢物語』八十二段挿絵)

同じ和歌に対して、複数の異なった挿絵(歌意図・歌意絵)があれば、その違いに着目して挿絵の意図を検討することができよう。そ

のような観点から、前稿では、『百人一首』に選ばれた和歌の挿絵を取り上げた。この挿絵も、同様の観点から考察するに相応しい材料となろう。

君臣和楽の状況を描いた嵯峨本『伊勢物語』の挿絵と較べると、挿絵③は、業平の独吟詠として絵画化されている点が特色である。

詞書では、「なぎさの院にてさくらを見てよめる」と、惟喬親王との交歓の状況はまったく触れられず⁽¹⁹⁾、独吟詠と理解する余地はある。『伊勢物語』から独立させて味わうと、宴の場に応じた即妙の和歌ではなく、独り、桜の存在に思いを馳せる男の姿が浮かび上がってくる。いずれにせよ、『伊勢物語』的な理解になりがちな業平歌に対して、別様の鑑賞が示されている点で注目される挿絵なのである。

挿絵③に対応するのは、

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじめてあそびける日、
法皇御覽じにおはしましたりけり、ゆふさりつかたかへりおはし
まさんとしけるおりによみてたてまつりける

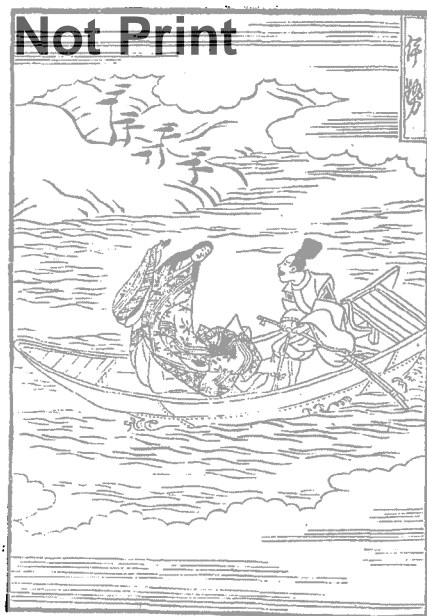
(雑上 伊勢 920)

である。詞書に拠れば、中務卿親王邸の池で、管弦などの船遊びをした日に、親王の父親である宇多法皇が行幸なさり、夕方に法皇がお帰りになるうとした折に、引き留めようとして詠まれたことが分かる。

挿絵では、伊勢が(不安定な?)船上で片手を掲げ身をひねって佇む姿勢で描かれる(【図版29】参照)。詞書の内容から、伊勢の視線(と

意識)は、法皇へ向けられていると解せよう。これだけでも印象的な挿絵であるが、この挿絵は、少なくとも「絵入古今A本」の挿絵のなかで、かなりユニークな構図で描かれているのである。

【図版29】 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵 二次使用禁止



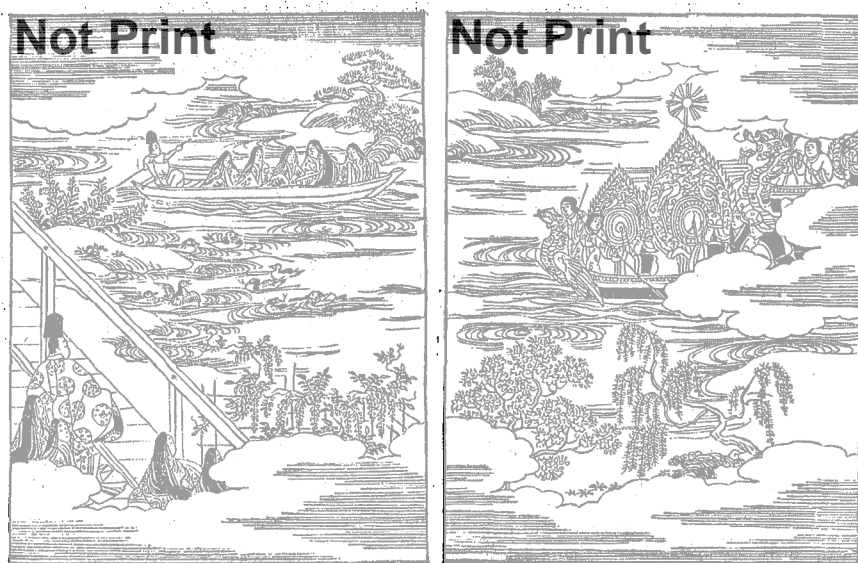
(「絵入古今A本」挿絵③)

多くの挿絵は、眺める人物(作者)と眺める対象(桜、梅、時鳥など)を一図に描くことで、状況を絵画的に伝えようとするが、この挿絵では、眺める女性は描かれていても、その対象となる法皇が描かれていない。伊勢の眺める対象である法皇が、あたかも挿絵を眺める鑑賞者の側にいるかのように、伊勢の体(顔)はこちらを向く。これがこの挿絵の構図のユニークな点である。

船遊びは、豪華絢爛な王朝人の生活を象徴する行事の一つである。『紫式部日記絵詞』(藤田美術館本)には、十六夜の夜、女房らが船遊びをしたり、道長が新造の龍頭鶴首の船を眺めたりする、雅やかな場面が描かれる。『源氏物語』でも、幾度か船遊びの場面が

語られる。六条院で行われた船遊びの様子を光源氏が釣殿から見物する場面(胡蝶)の挿絵を、「絵入源氏物語」(慶安三(一六五〇)年山本春正跋)から掲げよう【図版30】参照。

【図版30】 国文学研究資料館データベース古典コレクション 二次使用禁止



〔絵入源氏物語〕胡蝶挿絵)

挿絵③の場面は次のように解されようか。還御しようとする宇多

法皇の前に、一艘の船が現れ、船上に独りの女性が佇んでいる。女性には、片手を上げて身をひねり、法皇の還御を惜しむ和歌を献ずる。眼前に展開する光景を眺める法皇の立場で鑑賞できるように描かれている点がこの挿絵の趣向であると捉えたい。

おわりに

ここまでの内容をまとめ、今後の課題を確認したい。

「絵入古今A本」では、和歌を絵画化するにあたっては、対象となる和歌だけでなく、周辺に配置された和歌の内容をも参照して、構図などを決める場合があった。和歌の配列を意識して絵画化する方法は、他の和歌集の絵入り本の挿絵を検討する視点の一つとなるだろう(二)。

「源氏物語絵」や「伊勢物語絵」にも見出せる、主人に従者が傘を差し掛ける描写は、物語的な雰囲気醸し出すには打って付けの構図である(三)。挿絵の構図が、嵯峨本『伊勢物語』の挿絵と類似する場合もあり、先行する絵画作品との比較も丁寧に行う必要がある(四)。特徴的な構図は、先行する絵画作品だけでなく、美術工芸品と比較するという方法も有効ではないか。そのための基本資料を整理する作業を行わなければならない(五)。

複数の異なった挿絵(歌意図・歌意絵)があれば、その違いに着目することで、挿絵の意図が浮かび上がってくる場合もある。挿絵③のような、特徴的な構図の挿絵に着目するのも有効であろう(六)。残された課題は多いが、和歌の絵画化の問題を検討するために、挿絵の趣向を正しく捉える作業を続けたいと思う。

注

- (1) 拙稿「『絵入古今和歌集』(延宝七年刊本)の挿絵―その編集方針と趣向について 附・影印―」(『広島国際大学医療福祉学科紀要』7、平23・3)。以下、本文中の「前稿」は、すべて、この拙稿を指す。
- (2) 人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵(二次使用不可)。全四冊。ただし、「第三冊巻二―一六哀傷の部のみ享保6年住如写」(国文学研究資料館公開データベース「マイクロ/デジタル資料・和古書所蔵目録」の書誌詳細)である。なお、本稿では、「国文研本」の挿絵を掲載し、必要な場合は、注記して「今治本」(336-75)を再掲する。
- (3) 嵯峨本『伊勢物語』は、角倉素庵が、本阿弥光悦と協力して、慶長十三(一六〇六年)五月に、初版を刊行した木活字本のことである。何度も再版され、その後の『伊勢物語絵』の普及に大きく貢献した(千野香織『日本の美術301『絵巻Ⅱ伊勢物語絵』(至文堂 平3・6)』)。
- (4) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(中)』(講談社 平10)
- (5) 「汐汲。汐水は女の業として、これ汲也。同じ海浜の者なれば、魚とる海人になぞらへ汐汲海人ともいへり。(中略)哥人もこれをめで、和哥には詠ずるぞかし」と説明される。
- (6) 江戸版『百人一首像讀抄』藤原定家歌歌意図では、「焼くや藻潮の」に対応して、潮汲む海人(男)が描かれる。
- (7) 久保田淳馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 平11)「笠」(田中登執筆)
- (8) 『伊勢物語』80段の挿絵でも、主に傘を差し掛ける従者が描かれる場合がある(大英図書館本、小野家本「伊勢物語絵巻」)。
- (9) この挿絵では、視点人物が男に描かれており、作者を男と取り違えていることになる。注(1)掲出拙稿参照。
- (10) 注(3)掲出書参照。
- (11) 注(9)に同じ。そうなると、当該和歌は、
人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ(古今集 恋一 不知 534)
君てへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆるわがこひ(古今集 恋四 忠行 680)
などのように、男が、我が身の恋の思いを富士の煙に喩えた和歌として解されていたことになろう。
- (12) 前稿では、「絵入古今A本」の挿絵で、二条后や惟喬親王の和歌が取り上げられたのは、歌人としての力量というよりも、『伊勢物語』の登場人物としてよく知られていたことが背景にあったのではないかと推測した。また、「絵入古今A本」の挿絵に描かれた和歌で、『伊勢物語』にも引かれている和歌は、前引の業平歌を含めて、

53 番歌(よの中にたえて桜の)在原業平) ↓八十二段、

373 番(思へども身をしわけねば)伊香淳行) ↓八十五段(ただし、改作歌)

623 番歌(みるめなき我身をうらと)小野小町) ↓二十五段、

724 番歌(陸奥の忍ぶもぢぢり)源融) ↓初段(若干の詩句変更)

と、四首見出せる。「絵入古今A本」の挿絵編集で、『伊勢物語』が意識されていた可能性は高い。挿絵④の行平歌(こきちらす瀧の白玉ひろひをきてよのうき時の涙にぞかる)も、『伊勢物語』には引かれていないが、『古今集』では、続けて、業平の「ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせば」が配置され、こちらが『伊勢物語』に引かれるので、やはり、『伊勢物語』の世界が連想される。

(13) なお、このような姿勢は、「時雨ゆゑかづくたもとをよそ人はもみちをはらふ袖かどや見ん」(拾遺集 冬「屏風に」平兼盛 222)「なよたけのおとにぞ袖をかづきつるぬれぬにこそはかせとしりぬれ」(金葉集 冬「竹風如雨といへることをよめる」中納言基長 264)「雪と見てぬれもやすると桜花散るに袂をかづきつるかな」(六華集 春 貫之 244、毘沙門堂古今集註 33)など、詠歌の対象にもなっていた。久保田淳 馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 平11)「被く」(佐藤明浩執筆)参照。

(14) 「涙に春雨にあふよ、又折ふし春雨の比物おもふ人のよめるにや」(『両度聞書』)。竹岡正夫『古今和歌集全評釈 下 補訂版』(右文書院 初版 昭51)

(15) 「人が雨に濡れるとき―愛の証と風流心―」(『人が走るとき 古典のなかの日本人と言葉』笠間書院 平22 第一章第三節)

(16) 新日本古典文学大系『後撰和歌集』(岩波書店 平2)

(17) 白畑よしは、描かれた伊勢のポーズについて、「伊勢の、引用者注)歌に応じるように、片袖を頭にかざして、春雨にぬれないようにという意味をかけているのかもしれない」と述べる(日本の美術96『歌仙絵』至文堂 昭49・5)。

(18) 山本登朗はこの挿絵を「右上の建物が梅壺、そこから男と供の童が、肘笠姿で雨をよけながら出て行くさまを描く」と説明する(羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』角川学芸出版 平19)。

(19) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(上)』(講談社 平10)

【掲載図版リスト】(「絵入古今A本」を除く)

○中村幸彦 日野龍夫編『新編稀書複製會叢書 第三十五卷』(臨川書店 平3)【図版3】の『新撰御ひいながた』

○『続・日本の意匠 文様の歳時記12 年中行事』(京都書院 平7)【図版3】の奥村政信画「七夕祭」

○片桐洋一編『伊勢物語 慶長十三年刊嵯峨本第一種』(和泉書院 昭56)【図版7】【図版13】【図版15】【図版17】【図版19】【図版21】【図版28】

○版本文庫9『百人一首像讀抄』(国書刊行会 昭50)【図版9】

○朝倉治彦校注 東洋文庫519『人倫訓蒙図彙』(平凡社 平成2)【図版11】

○伊井春樹「資料 源氏鬘鏡」(『源氏物語の探求 第六輯』風間書房 昭56)【図版12】

○白畑よし 日本美術96『歌仙絵』(至文堂 昭49・5)【図版24】

○羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成 資料篇』角川学芸出版 平19)【図版25】

○『日本の意匠 第6巻 伊勢物語・詩歌・能楽』(紫紅社編集・制作 京都書院発行 昭59)【図版26】

○中村康夫・立川美彦・田中夏陽子監修『源氏物語(絵入)』(承心版本)』CD-ROM

(国文学研究資料館データベース古典コレクション)(岩波書店 平11)【図版30】

【参考文献】

○竹岡正夫『古今和歌集全評釈(上・下) 補訂版』(右文書院 初版 昭51)

○片桐洋一『古今和歌集全評釈(上・中・下)』(講談社 平10)

【付記】「絵入古今A本」の掲載のご許可を賜りました、人間文化研究機構 国文学研究資料館、今治市河野美術館関係者の方々に御礼申し

上げます。